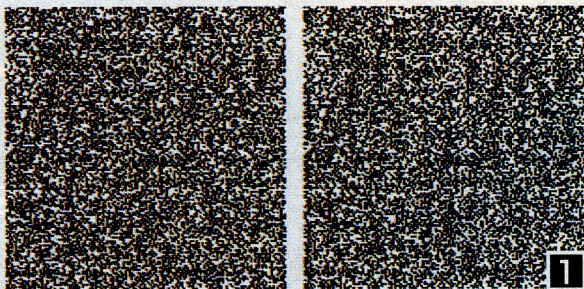


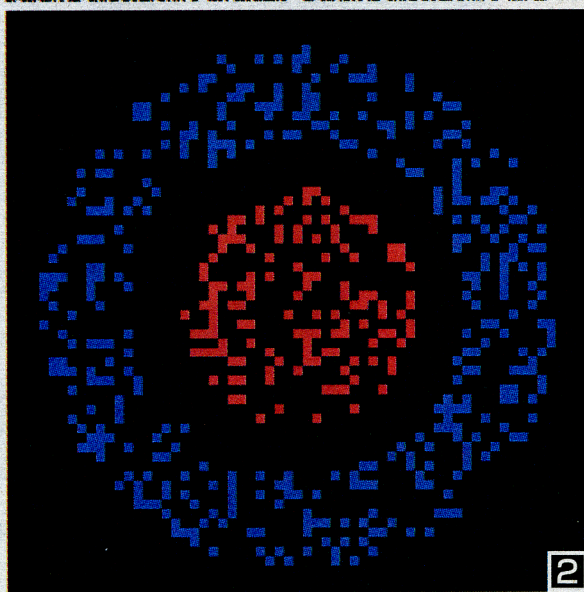
目の冒険

錯視の話⑪

北岡 明佳



①ステレオグラムの例。左目で左の図を、右目で右の図を見ると、中心に正方形が浮かんで見える②色立体視の例



錯視の本は売れない、

というのが常識のはずだった。ところが、今春発売された専門書「錯視の科学ハンドブック」(後藤倬男・田中平八編、東京大学出版会)は1万3千円もするのに売れ行きを伸ばしているらしい。

錯視の

仲間で意外な売れ

行きを示すもののナンバードワンといえば、何といつてもステレオグラム(①)である。周期的にブームが来て、大勢の人が平面の図形から立体図形を見ようとす。

しかし、知覚研究の専門家から見ると、これは不可思議な現象と言わざ

るを得ない。ステレオグラムから立体図形が見えるのは当たり前ではない

か。両眼は約6センチ離れているので、遠くのものと同じくのものでは目に映る位置が違うのである。その情報を平面のステレオグラムにあてはめて、も

と、一つにはその修行的性格があると思う。

なお、ステレオグラムをみんなどやる時には、一見健常に見えても両眼立体視ができない人も少なくないので、十分な配慮が必要である。

修行して見る立体図形

印刷具合によるが、練習不要の

ステレオグラムが

の奥行きを脳が計算しているだけで、特段すぐく面白ということはないと思うのだが。

ただし立体図形が見えるようになるには、練習が必要だ。私は時間がかかって3カ月を要した。ステレオグラムが面白い理由を私なりに推定する

ある。色立体視という。②では、6〜7割の人は赤が青より手前に見える、2割程度の方は青が赤よりも手前に見える。1割以上紙面から離れて見た方が効果大きい。理論上は、色覚異常の人も見えるはずである。

(立命館大助教授)